

千葉常胤生誕900年 記念講演議事録

●記念講演

テーマ「千葉常胤 63歳で世に出た人」

■講師 近藤 成一 先生

(放送大学教授、東京大学名誉教授)

■平成30年5月27日(日)

■三井ガーデンホテル千葉

○司会 皆様、大変長らくお待たせいたしました。ただいまより千葉常胤生誕900年記念講演・歴史文化フォーラムを開始いたします。

私は、本日の司会進行を務めさせていただきます千葉市総合政策局総合政策部都市アイデンティティ推進課の市倉でございます。どうぞよろしく願いいたします。(拍手)

初めに、主催者の千葉氏サミット実行委員会委員長、千葉滋胤より開会の御挨拶を申し上げます。

○千葉滋胤(千葉氏サミット実行委員会委員長) 皆さん、こんにちは。ことしは千葉常胤が誕生して900年ということでございまして、第2回の千葉氏サミットを開催いたしました。きのうから始まっておりまして、きょうが2日目でございます。

きょうは、ここにも書いてございますように、記念の講演会と歴史文化フォーラムという2つで長時間にわたります。プログラムの中に書いてございますけれども、フォーラムのほうは1部とインターミッションといたしますか、途中でお休みもございまして、大体予定でいきますと、ここに書いてありますように17時35分、これでおさまるかどうか。いずれにいたしましても、長丁場でございますので、ひとつその辺のところをお含みください。

それで記念講演のほうは、お手元にある資料にございますように、講師を近藤先生にお願いすると。近藤先生は、幕張のところですが、美浜区の放送大学と本郷の東京大学と両方で、お住まいは千葉でございますので、それこそ、いろんな形でお話しただけなんだと思います。講演会が終わりますと、その次に今度は歴史文化フォーラムということで、お手元の資料に書いてあるように1部と2部と行われますので、ひとつそれぞれの中でいろいろ御検討いただければと思います。長丁場でございますので、すぐ始めていきたいと思っております。近藤先生のお話のほうからスタートしたいと思っておりますので、よろしくお願い申し上げます。(拍手)

○司会 ありがとうございます。

それでは、これより記念講演に移りたいと思っております。本日は、中世史研究の第一人者で放送大学教授・東京大学名誉教授でいらっしゃいます近藤成一先生をお願いしております。テーマは「千葉常胤 63歳で世に出た人」でございます。近藤先生、どうぞよろしく願いいたします。

○近藤成一 ただいま御紹介にあずかりました近藤成一でございます。どうぞよろしくお

願いたします。

千葉会長から御紹介くださいましたように、私は約30年前から千葉市民になっておりますけれども、東京のほうに勤務しておりましたので夜だけの市民だったんですけれども、2年前から勤務先が幕張のほうになりましたので、ようやく地元に貢献させていただけるかなと思っております。2年前からは、同じ千葉市の芸術文化新人賞の選考委員もやらせていただいております。ことしも必ず募集いたしますので、またぜひ応募していただければありがたいと思っております。

今回は千葉氏サミットの記念講演という大変名誉ある役目を与えていただきまして、大変ありがたく思っております。第1回のサミットは一昨年8月に行われたわけですが、そこでは、私の先輩になりますけれども、野口実先生がお話になりました。野口先生は「東アジア世界・列島社会の中の千葉氏」というお題での講演で、千葉氏の誕生から鎌倉時代までの歴史の全体を最新の研究に基づいて話されました。今回は、ことしが千葉常胤生誕900年ということ。後でお話ししますが、900年前ですから、1118年の5月24日です。もちろん太陽暦、太陰暦の違いがあるんですけれども、ざっくりいって、常胤が生まれて900年と3日たったところがきょうだということでございます。詳しいことはお聞きしていませんけれども、多分5月に第2回サミットが開催されたのは、常胤の誕生日に一番近い日曜日を選ばれたのかなと私は勝手に思っております。

常胤生誕900年ということで、千葉氏の長い歴史の中でも鎌倉幕府の創設という事件に立ち会った千葉常胤という人物に今回は焦点を絞らせていただくことにしました。ただ、それにしましても、常胤の生涯につきましても、2年前の野口先生の講演の中であらかたは話されてしまっておりまして、今回の私の役目は、常胤の生涯をさらに詳しく話せということだと思っておりますけれども、どう詳しく話そうかと思ひまして、資料のほうをごらんくださってうんざりされた方もひょっとするといらっしやるかもしれないんですけれども、実は史料を通して常胤の生涯をかいま見てみたいということを、今回、自分自身への課題にさせていただきました。史料を読むと申しますと、何か難しいように思われてしまうのかもしれませんが、それをわかりやすく説明させていただくというのがきょうの私の目的であります。史料を読むのを楽しんでいただき、さらには、きょうのお話を聞いていただいた後で、これから史料を通して歴史を研究してみようかなと思っております。最後には、これから実際にさらに研究を深めていくにはどうしていったらいいのかという研究の

ための手だての話もさせていただきたいと思っております。

さて、千葉氏は桓武天皇のひ孫に当たる高望王が臣籍に下り、平姓を与えられたことに始まる桓武平氏の一流であります。桓武平氏のうち、坂東で繁栄した諸流と平将門、平清盛を加えた系図をこのスクリーンのほうに示しました。熊谷市長と同じ名字の熊谷直実は、北条時宗や平清盛と同じく平国香を先祖といたしますが、それに対して千葉常胤は渋谷重国とともに平良文を先祖といたします。

実は私は学生時代以来、この渋谷重国の子孫で、薩摩国入来院に拠点に移した家の歴史をひそかに研究しておりますが、この入来院にも妙見社——妙見信仰については、この後のフォーラムで詳しく検討してくださるということなんですけれども、今の鹿児島県薩摩川内市でありますけれども、その入来院の地にも妙見社がございます。入来院はもともと千葉常胤に与えられた所領で、実はこれも2年前の野口先生のお話の中でかなり詳しく触れられているのですけれども、薩摩国の中で411町2段の田地、これは年貢が課税される公式の田数ということですから、実際に存在する土地はこれの何倍もあるわけなんですけれども、公式課税面積で411町2段という土地を千葉介、すなわち常胤は与えられております。この場所が入来院に当たります。入来院も含む周辺の所領が千葉介に与えられていたのですけれども、それが千葉氏の嫡流ではなくて分流に当たりますけれども、この左側の系図は資料の中にも入れさせていただきました。実は私がここで講演するということ、野口先生が先ほど司会して下さった市倉さんから数日前にお聞きになったようで、私に資料を大量に送ってくださりまして、これで講演をしろということで大変助かったんですけれども、その中の資料の1つであります。

赤で囲ったのが常胤でありますけれども、常胤の子供の胤正の子供、孫が2人います。これは私と同じ「成」という字を使っているのですけれども、これまた、2年前に野口先生が、「しげたね」ではなくて「なりたね」と読むのが正しい読み方だとおっしゃっていました。成胤と常秀、この2人の兄弟から家が分かれるんです。常秀の子供の秀胤というのが鎌倉幕府の中で大変出世して評定衆を務めているのですが、逆に高い地位に就いていたがために、1247年のことなんですけれども、将軍と執権との権力争いに巻き込まれて、三浦泰村とともに滅ぼされます。そのときに千葉秀胤に伝わっていた所領が全部没収されて、そのうち薩摩の所領が、つまり三浦、千葉両氏——千葉と言ったって、千葉傍流のほうです。嫡流は生き残るんですけれども、千葉秀胤を滅ぼすのに貢献した渋谷一族に与えられるんです。それから薩摩の中の入来院の土地を手に入れた渋谷氏が繁栄して今日

に文書を伝えているということで私も研究してきたんですけれども、そういう経緯がありますので、ひょっとすると入来院の妙見社というのは、千葉氏が勧請したものが、領主がかわっても現地に残ったのかなと、私は長い間思っておりました。

ところが、実は、ことし放送大学の大学院で修士号をおとりになった方で、妙見信仰をテーマとして修士論文を書かれた方がいらっしゃるんですけれども、その方の御研究を拝見しましたら2つのテーマを立てられて、1つはもちろん千葉氏の妙見信仰なんですけれども、もう1つは秩父神社の妙見信仰なんです。秩父神社の祭神が妙見神であるということは、つまり秩父平氏——秩父平氏というのは、この系図の最後は渋谷氏になっているんですけれども、渋谷氏を含むこの流れが秩父平氏です。渋谷氏というのは必ずしも秩父平氏の主流でもなくて、渋谷氏のほかに、例えば畠山氏ですとか、川越氏ですとか、もちろん嫡流は秩父氏です。そういったものを含む一族なんですけど、その信仰の中心が秩父神社だったわけで、その祭神が妙見神であるということが論文で扱われていました。

そうすると、妙見信仰というのは必ずしも千葉氏だけではなくて、秩父氏流も信仰している。つまりは平良文を先祖と仰ぐ一族の信仰なのかなと思っていたんですが、実は妙見信仰はこの後フォーラムの中で話題になりますので、妙見信仰そのものについてはこの後のフォーラムにお譲りしたいと思いますけれども、私自身の今までの研究の中で、千葉氏や妙見信仰とどこで接触していたかなというのと、そのあたりで接触していたということがあります。

さて、このあたりから本題に入りたいと思うのですが、「千葉常胤 63歳で世に出た人」という題名をつけさせていただいたのは、本当のところは、私がことし63歳になるということなんですけれども、千葉常胤が63歳のときに何があったのかというと、源頼朝の挙兵というのがありまして、まさにそれを千葉常胤は支えて鎌倉幕府の創業につながったわけです。その話はきょうのお話の後半でさせていただくわけなんですけれども、その年が西暦でいいますと1180年で、千葉常胤が数えて63歳ということになります。

実はこのテーマをつけた時点では、正直に申しますと、まだそれほど千葉常胤について詳しく調べていたわけではないというか、もちろん千葉常胤というのは有名人物で、単に有名人物というだけではなくて、研究上も非常に重要な人物であり、常胤に関する史料もかなりあるということは学界では周知のことです。私もそれなりに、もちろん勉強はしていたわけです。ただ、それはやっぱりそれなりでありまして、詳しく専門的に研究していたわけではないのを、今回、改めて千葉常胤の史料をもう一遍振り返ってみま

すと、やはりかなり膨大にある。

膨大にあるのも、1つには、ちょうど63歳、1180年を境として、彼の人生は2つに分かれるわけですが、63歳から後については、後で御紹介しますけれども、『吾妻鏡』という史料は鎌倉幕府の歴史を鎌倉幕府自身がまとめた歴史書でありますけれども、鎌倉時代のうちにつくられていると考えられていて、その中に相当詳しく出ています。ただ、『吾妻鏡』に詳しく出ていているという点では、千葉常胤が一番詳しいかもしれませんが、千葉常胤以外にも同じような武士、例えば三浦義澄ですとか、畠山重忠ですとか、何人かいます。

もう1つの特徴は、『吾妻鏡』以前と申しますか、言いかえますと、1180年の頼朝挙兵以前の事績が一次史料によって相当詳しくわかるというのはなかなかないんです。それこそ常胤クラスで、今、ばらばらと名前を挙げました三浦だとか、畠山だとか、つまり『吾妻鏡』でも有名になるような人物で、『吾妻鏡』以前の事績がわかるというのは常胤しかいません。

『吾妻鏡』レベルの有名人物ではないけれども、一次史料を残した武士の家というのは幾つかあります。先祖は全然有名じゃないんですけれども、子孫がとんでもなく有名になって、ことしの大河ドラマにも出てくると思いますけれども、小松帯刀という人物がいますね。小松帯刀の先祖というのは大隅国の豪族なんですけれども、禰寝^{ねじめ}という家でした。禰寝を小松という名前に変えるのは江戸時代のことなんですけれども、禰寝という家の文書は平安時代にさかのぼりますけれども、点数は2～3点ですし、そこに出てくる禰寝清重というような人物の知名度と千葉常胤の知名度は、当時においても今日においても全然違います。そういう意味では、歴史学界においても、やっぱり千葉常胤というのは研究者にとっても、研究対象として非常に大切な人物であることに改めて気づきました。

それこそ史料を通して常胤の人物像を見てみたいという欲求が高まったわけですが、ただ、いかんせん、あと53分ほどでお話をしなければならないということになりますと、これは相当史料を絞らなくちゃならないということになりました。皆様のお手元に10ページほどの史料を配らせていただいて、普通は1時間の講演で10ページは、しかも、史料ですから多いんですけれども、実は千葉常胤のために使いたい史料はこの何倍では済まないです。10倍ぐらいあります。それをとにかく選びに選んで絞りました。

まず、常胤に対する一番基本の史料は、私の資料の中で一番最後の資料になります。史料9というものです。系図は頭のほうに載せているんですけれども、史料9は『吾妻鏡』

であります。ちょっと画面で見ながらお話しします。

史料9であります。これは『吾妻鏡』の——建仁元年ですよね。西暦が間違っています。建仁元年は1201年です。たまたま西暦と年号が一致するから覚えやすいのに、申しわけありません、間違えました。1201年の3月24日ですけれども、常胤が亡くなった記事です。短いので読みますけれども、「千葉介常胤卒す。年八十四。従五位下行下総介常重の一男。母は平政幹の女。鳥羽院の御宇元永元年戊戌五月廿四日生ると云云」ということで、元永元年がすなわち900年前ですから、1118年の5月24日に生まれたということ、常胤クラスの武士という意味は、申しわけないですけれども、上位という意味ではなくて、頼朝クラスではないという、もうちょっと下のクラスという意味です。

御家人の筆頭クラスの武士であっても、生まれた日がわかる武士というのは非常に少ないです。貴族でも全部がわかるわけじゃないです。ですから、年齢は数えて数えることになっています。本当は満で数えたほうが年齢の感じがわかるんですけども、天皇については、ごく一部の例外を除いては誕生日がわかりますので満年齢で数えられるんですけども、天皇以外の貴族でも武士でも、生まれた日がわからないことが非常に多いです。つまり生まれたときの史料というのはないのが普通。常胤についてだって、ないわけですけども、大体亡くなった日の史料はある。亡くなった史料のところに享年幾つと書いてあると、それで逆算して生まれ年を決めるんです。大体、歴史上の人物について、生年月日の生年はそうやって決めています。ですから、月日がわからないことが多いです。

その中で常胤については、生まれた日までわかっていて、それが『吾妻鏡』に記されているというのはかなり例外的な史料の残り方だろうと思います。実は『吾妻鏡』に常胤の記事が膨大にあるんですが、ほかの武士でも同じぐらい載っているのもあろうというよりは少し多い。ですから、『吾妻鏡』の編纂に千葉氏関係の史料がかなり使われたのであろうと。

実は三代将軍、源実朝の時代に千葉氏が持っている古文書が幕府に提出されたということが『吾妻鏡』自体の中に記されています。千葉氏だけじゃないんですけどもね。有力な御家人から、いわば幕府の歴史調査のために文書を提出させたという記事があって、その中で千葉氏が提出したのがこれこれ。有名なのは、小山と三浦がそのとき史料を提出したということが記録に残っていますけれども、ですから、やっぱり『吾妻鏡』の史料源として、千葉氏関係の史料というのはかなり使われたんだらうなということはもちろん想像がつくんです。そういうことで、これが、千葉常胤の生まれたのと亡くなったのに関す

る根本史料ということになるわけです。

実はたった2行の史料で、普通、私の授業ですと、これで90分の話をするんですけども、きょう、それをやっていると言っていると先に進まなくなりますので、ここで話したいことはぐっと我慢しまーすと言おうと思ったけれども、やっぱりどうしても言いたいのは、母が平政幹の娘と書いてありますね。平政幹って、ちょうど野口先生がつくってくださった系図がありますけれども、常胤の母親の上をさかのぼると政幹。これを、ずっとさかのぼっていくと、もちろん桓武平氏なんですけれども、この一流は政幹の「幹」という字を代々使う一族で、これは常陸大掾氏と言っています。常陸国の在庁官人、つまり常陸国で繁栄した一族なんです。

もう1つ、常陸国で繁栄した佐竹というのが後で出てきますけれども、どちらかというところ常陸の北部、今の常陸太田のほうですね。あちらを拠点としたのに対して、常陸大掾氏と言われている「幹」の字を通字とする一族は常陸の国府、つまり今の石岡を拠点として、しかし、常陸の石岡から西部と南部一帯を支配した。この中で古文書を残した家は真壁という家が一番有名なんですけれども、それはもちろん真壁郡を支配したから真壁です。それから、もちろん霞ヶ浦のあたりとか、一帯を支配した一族。その一族の女性が常胤の母であるということは、つまり千葉氏のほうは下総一国を支配しているわけなんですけれども、その一族と、それから常陸の南部というか、北部を押さえている佐竹氏以外、全部と言ったほうがいいんですけれども、そちらを支配している常陸大掾氏の中の一族との間で婚姻関係が成立している。さらに言うと、常胤の妻は、さっきちょっと申しました秩父平氏の出身ですから、その秩父平氏との間でも婚姻関係が成立しているということになるわけです。ですから、結構広いネットワークがある。

その話をすると、もう一言言わなくてはならなくなるんですけども、父親の名前が従五位下行下総介常重。官位が書いてありますね。実は常胤は一段低くて正六位なんですけれども、後で出てきます。父親も、それから常胤も官と位を持っています。官と位を持っているということは、これは勝手に名乗るということではないので、朝廷からもらっているんで、下総にいたまま官位をもらうということはありませんので、必ず京都に行っているはずなんです。ですから、常胤も、その父親の常重も在京経験、つまり京都にいた経験があるということです。

そんなの当たり前と言えれば当たり前なので、千葉常胤は、保元の乱に従軍しています。保元の乱というのは、周到に準備して起こった戦乱ではなくて突発的に起きちゃった事件

ですから、保元の乱に従軍しているというのは、たまたまそれが起きたときに源義朝の近辺にいたということです。当然、在京している源義朝の近辺に千葉常胤がいて、突然の軍事動員に応えることができたということです。なるほど、その時点、つまり保元元年（1156年）の7月という時点で、常胤は別に保元の乱のために京都に上ったわけではなくて、その時点で京都にいたと考えなくちゃいけないということで、常胤も、その父親の常重も行動範囲は結構広かったと考えないといけないです。

これは、鎌倉幕府ができる前から武士はそうなんですけれども、鎌倉幕府ができてますますそうなるのは、彼らの土地が全国にまたがる。ですから、千葉氏サミットができるわけですね。先ほど挙げました渋谷氏だって、これだけ赤丸をつけたところに土地を持っているわけです。だから、渋谷氏サミットだって、できるんですよって、ここで言うてもしょうがないので、渋谷区で言わなきゃいけないんですけれども、大体、鎌倉時代の武士って、みんなそういう形です。これらの土地を結構遍歴して回っているんです。ですから、やっぱり当時の武士の行動力というのは結構大きいものがあると思います。

その次に扱いたいのはということで、少し時間を気にしなければいけないんですけれども、あと40分で2つの話をしなくちゃいけない。おまけの話を除いてもね。

1つは、要するに1180年、頼朝の旗揚げに至るまでの常胤の前半生について、常胤自身が一番重要と思っていたかどうかかわからないんですけれども、後世の我々研究する者にとって、常胤について残っている史料で重要なものは何かというと、相馬御厨に関する史料なんです。ちょっと地図を示しておきましたけれども、ここに相馬御厨と書いてあるんですけれども、これは東京湾です。ここは千葉庄です。ちなみに、ここは東庄です。このあたりということば、いわば柏だとか、我孫子だとか、大体そっちの方面です。本来、相馬御厨は広くて、市川市のほうまで下ってきているわけなんですけれども、下総の北西部と言ったらいいんですかね。もともと相馬郡が相馬御厨になっているわけですから、そういう土地であります。

この土地を千葉常胤が一生懸命守るために、伊勢神宮に寄進して保護を受けたということに関する史料が非常に重要。非常に重要というのは、12世紀の終わりに鎌倉幕府はできるわけなんですけれども、初めというのは、ちょうど白河院政期ですね。大治という年号が出てきますけれども、白河法皇が亡くなるころです。ということは、むしろ院政が第2段階に入って、白河院政から鳥羽院政にかわるあたり。鳥羽院政が終わるときに保元の乱が起きるとい歴史の流れになるわけなんですけれども、そういう、いわばかなり古い時代から鎌

倉幕府ができる直前までの間、この事件は続きます。

その中で、つまり千葉氏にとって重要なことはもちろん、あるいは千葉氏だけではなく、これに実は佐竹氏が関連してくるんです。あるいは、千葉氏の一族であるけれども、ライバル関係にある上総氏も関係してきますが、そういう関係者たちにとって重要であるというだけでなく、後世の我々からすると、この12世紀において、全国的に荘園が全面展開するんです。荘園の起源は古いですが、全国的に全面的に広がるのは12世紀です。12世紀に荘園がどういうからくりで広がっていったのかということをも典型的に示す事例なんです。ですから、相馬御厨に関する史料は十数点あるんですけども、それを丁寧に読み解くということが非常に大事になります。きちんと見ていただく必要は全然ないんですけども、相馬御厨に関する史料がどれだけあるのかということも、ざっとお示ししました。この中で赤枠で囲った永暦2年（1161年）の常胤の寄進状だけを取り上げます。

史料1というのがそれでありまして。こんな漢字ばかりの資料を出すのはやめてほしいと思われると思うんですけども、こういう史料を見たときに、例えばラテン語だとかアラビア語等だったら、どこから読むか違いますよね。だけど、もちろん日本語ですから、右上から左下に向かって読むのはそうなんですけれども、その順番に最初から1字ずつ読んでいったら、大体10文字目ぐらいで挫折します。文書というのは1字ずつ見るのではなくて、絵として見てください。全体を二次元に広がったものとして見てください。

字の配置というのは非常に大事です。まず、どこを見ていただければいいかというと、最初と最後を見ていただければいいんです。この史料の場合、ここに「判」と書いてありまして、この後、ずっとまた続いているんです。けれども、ここで一旦切れています。実はこの部分は常胤がつくった文書です。常胤が提出した文書を受けて、文書を受け取った側が後で加えたものがこの部分なんです。だから、まずは永暦2年2月27日という、この行までを見てください。そうすると、永暦2年2月27日という日付が一番最後に書いてありますよと。まず、日付があれば、いつ出されたものかがわかる。わかるといたって、永暦2年なんて言われたって、いつかわからない。永暦2年が西暦の何年に当たるのかというのはいろんな方法で調べてください。今、ウェブで検索しちゃえば、永暦で引けば出てきますから、それが一番簡単ですかね。

その下に署名しているのは常胤自身です。「正六位上行下総権介平朝臣常胤」と署名しています。これが常胤の正式な名乗りなんです。「千葉常胤」という表現は、現代の便宜的な呼び方です。例えば『吾妻鏡』にはどう書いてあるかというと、『吾妻鏡』には「千

「千葉常胤」という書き方はしています。だけど、当時の人はどう呼んだかというのと、まず自分が名乗るときには、正式にはこういう名乗り方です。最低限名乗るときには「平朝臣常胤」です。つまり「千葉常胤」とは名乗らずに「平朝臣常胤」と名乗るんです。これは千葉氏であれ、渋谷氏であれ、畠山氏であれ、本姓は平なんです。ですから、平と名乗るのが正式。

では、「千葉介」というのは何かというと呼び名なんです。ほかの人がその人を呼ぶときに「千葉介殿」と呼ぶんです。この呼び名というのはちょうど屋号と同じようなもので、世襲になります。ですから、この家の人は代々嫡流、家督は「千葉介殿」と呼ばれることになっていくんです。ただ、「千葉介殿」という呼び名が決まるのは常胤以前ではないと思います。恐らく常胤のときだと思います。彼の正式の名乗りが正六位上行下総権介というのは、先ほど父親の常重について『吾妻鏡』の記事で申し上げたのと同じで、常胤も正式の官位を持っているということなんです。当時の武士はみんな持っているわけじゃないですからね。やっぱりそういう意味では京都とのつながり、朝廷とのつながりを、常胤よりも前の代からずっと持っている家ではあるわけです。そのことが名乗りだけでわかります。

「行」という字、気になりますか。その話をしていると90分では終わらなくなるんです。と言いながら、言っちゃったから、そこだけ言って、これ以降、雑談はやめますけれども、実は正式に朝廷の官人になるとときには、官と位と両方ペアでもらうんです。そのときに、官と位がほどほどのバランスというのがあります。つまり官がとんでもなく高く、位がとんでもなく低い。例えば太政大臣なのに正八位なんていうことは絶対にないわけです。太政大臣だったら一位でなくちゃいけないわけですよ。下総権介に当たるのが大体これぐらいだという官位相当というのはあるんですが、官位相当をぴったりするのは非常に難しいんです。官と位のバランスがどうしても崩れてしまうことが臨時にあります。

位のほうが官よりも高い場合、位と官の間に「行」という字を挟みます。ちなみに官のほうが位よりも高いときには「守」という字を挟みます。ですから、この場合、正六位上という位は、下総権介よりもちょっとだけ高い地位なんです。ということは、下総権介の相当位というの正六位上よりも下だという考えに基づくわけです。そこまでにしておきます。とりあえず署名からそれがわかる。

そして、まず差し出し書きを見ますと、これもまた、「正六位上行下総権介平朝臣常胤

解し申し請ふ二所太神宮庁裁の事」と書いてあります。今、このとおりにお聞きになると、日本語になってないじゃないか。日本語の語順ではないですね。今のを少し日本語の語順に近づけて言いますと、「正六位上」云々は常胤と略称しますがけれども、常胤が二所太神宮の役所の裁断を申請することについてという内容になります。「解し申し請ふ」というのは、たまたま現代語の申請と同じ文字使いですがけれども、そういう意味なんです。「解」というのは、下から上に申請することが「解」なんです。「二所」というのは、伊勢神宮の内宮と外宮の2つを指すわけです。内宮・外宮の判断を申請いたしますということを言っているんです。

何を申請しているかという、その次の3行に趣旨が書いてあります。これは「状」で終わっているんですが、文書一般では「事」で終わらせるので、事書（ことがき）と古文書学では呼んでいます。これは現代の公文書でも一番上に、何々についてという表題が必ずつきますでしょう。その表題を書いた後、本文に入る最初は、専門の方がいっぱいいらっしゃる前と言うとぼろが出るかもしれないんですが、私の認識では、大体、「標記について」。「標記について」というのは、表題があって、そのことについて以下説明するという意味で「標記について」と本文を書き始める場合が多いんじゃないかと思うんですが、古文書の中では、「標記について」に当たるのが「右」という文字であります。この「右」という字がそうです。ここから本文が始まるということになります。

ちょっと急がなくてはいけません。少し急いで、時間が余ったら戻ってゆっくりお話ししますが、本当はこれ、全部読むつもりでいたんです。ですが、全部読んでいて時間がかかり過ぎますので、一体ここで何が言われているのかという話を先にしちゃいます。

これは、実は千葉常胤が相馬御厨の土地を伊勢の内宮と外宮とに寄進するというのを申請している文書なんです。今だって、寄附を申し込んだら必ず受け付けられるとは限らずに、寄附を受けた側が寄附を受けるかどうかを判断しますよね。その上で受け取る。当時はそうなんです。必ず寄進を受けるかどうかを、この場合は寄進された伊勢神宮の側が判断する。その判断が述べられているのが、さっき示しました判から後の文章で、左のほうを見ていきますと、こうなっています。判断するのに、内宮の禰宜と外宮の禰宜がずらずらと名前を連ねているわけです。内宮の禰宜、外宮の禰宜、それぞれ7人ずついるんです。その7人の禰宜が連名で署名している。これで受け付けたということを示しているわ

けです。

また冒頭に戻りまして、相馬御厨を寄進することが書いてあるよというお話をしたわけですが、相馬御厨というのは場所は一体どこなのか、「在下総国管相馬郡」と書いてあるでしょう。その後ろに「四至」と書いてあります。四至というのは東西南北の境界を指します。四至の下に「東限逆川口笠貫江」、「南限小野上大路」、「西限」云々、「北限」云々と書いてあります。これが東西南北の境界でして、この範囲を相馬御厨として、伊勢内宮、外宮に寄進するということを言っているのがこの文書なんです。

それは一体どういうことなのかといいますと、これは実は千葉常胤が相馬御厨の支配権、知行権を確保するために行った手段の1つなんです。そのために伊勢内宮、外宮に寄進するということを行いました。では、それはどういう意味を持つのかということ、先ほど列挙だけしたほかの史料とあわせて、どういうことが書いてあるのかということ、簡単に説明したいと思います。

これも含めました常胤の主要事績については、資料の一番最初に縦書きで年表のような形で入れてあります。これをごらんいただきますと、相馬御厨に関して一番最初にわかる話は、西暦でいいますと、1126年ということになります。常胤の父親の常重の代のこととか、その常重がおじの常晴の養子となって相馬郡を譲られたというのが1126年のことです。その4年後の1130年に経繁——これは字が違いますね。史料上の表記を尊重しています。だから、同じ常重というのが全然違う字で出てくるんです。逆に、これによって字の読み方がわかる。違う字を使っていて共通の読み方は何かというと、「つねしげ」しかないだろう。常重の場合、ほかに読み方はないと思いますけれども、とにかく1130年に常重が、皇大神宮というのは、つまり内宮に寄進しましたと。1135年には、常重が常胤に相馬御厨の地主職というのは、つまり現地支配権を譲っていますと。実は大神宮に寄進しているということは若干不安があったから、土地の支配を確実にするために寄進した。つまり大神宮の権威を仰ぐために寄進したんだと思いますけれども、実際、それが杞憂でなくて事件が起きます。

どういう事件かという、大体、地元での争いというのは国司との争いなんです。国司は、要するに現地で土地の開発が進んだならば、開発が進んだ分、税収を上げたいわけです。けれども、これは開発したほうは一般的に課税を逃れたいというだけでなく、開発した土地というのは非常に不安定なので、これに課税されると本当に経営が成り立たないんです。ですから、何とか課税を逃れなくちゃいけないということの努力をするんです。

が、1136年という年に、国司と書きましたけれども、要するに下総守です。下総国司藤原親通が常重に未進がある、未進というのは年貢の滞納があるといって、身柄を拘禁するんです。11月13日に親通の部下がこれこれのことをしたと書いてあるから、恐らくそれまで4カ月ぐらい身柄を拘禁しているんです。

その後、どうしているかということ、相馬、立花両郷の新券を押書する。押書というのは、無理やりに文書を書かせることを言うんですけれども、要は年貢未進の形として、相馬郷と立花郷を国司の管轄下に譲らせるんです。国司の管轄下に入れるって、つまり国衙領にするという意味ではなくて、国司の私的所有物にしてしまうんです。この立花郷というのは今の東庄です。それがとられてしまうという事件があります。それが1136年のことです。

さらにその7年後、1143年には源義朝が介入してきて、実はそもそも常重というのは、おじの常晴から土地を譲り受けているわけですけれども、その常晴というのは、大きく言ってしまうと上総氏というか、上総を拠点とする一族です。常重からすると、常晴の息子の常澄というのがいるんですけれども、常澄というのはいここに当たります。その常澄が源義朝と結託して、常澄の入れ知恵で源義朝が強引に常重から圧状を責め取る。要するに強引に文書を書かせる。ということは、常重から土地を取り上げるということです。義朝は取り上げた土地をその2年後、1145年に皇大神宮、内宮に寄進しているということになります。

ところが、その翌年の1146年に、常胤は国司に対する官物未進分、年貢の滞納分を納めたことによって、国司から相馬郡を管理することを認められます。そして、その相馬郡の管理を認められたことを受けて、4カ月後ですけれども、直ちに8月10日に相馬御厨を伊勢神宮の内宮の禰宜——実はまだ禰宜にはなってなくて権禰宜なんです。将来、禰宜になる資格のある人に——禰宜というのは7人という定員が決まっているので、欠員が出ないと、禰宜の家柄であっても禰宜になれないというがあるので、まだ禰宜にはなっていないんですけれども、荒木田延明に預けるということをしします。

ここの動きで疑問を持たれた方はいっぱいいらっしゃるんじゃないですかね。伊勢神宮に対して何度も寄進が行われている。それから、常重であれ、常胤であれ、例えば国司にとられた後、義朝にとられた。そしたら、国司にとられた後、常重が取り返したのか。これは、とったの、とられたのというのは権利のことです。実際に土地を支配しているというのはまた別です。そうすると、紛争が起きて、常重から、例えば藤原親通が取り上げ

た、源義朝が取り上げた、二重に取り上げるということはありません。それから、取り上げられながら常重、あるいは常胤が内宮に何度も寄進するということもあり得るわけです。それはどっちかわからないんです。常重、常胤が現地を支配できていなくても寄進をするということはありません。

実は今、ここで取り上げている史料1にも、伊勢神宮に寄進して、現地は私と私の子孫が管理させていただくと、しっかり書いてあるんです。そうすると、寄進を受けた側は、せつかく寄進してくれたのに何も持ってこない。よく調べてみると、現地が支配できていない。現地を支配させてあげなくちゃいけない。そうすると、敵陣を退けなくちゃいけないということ、つまり常重なり常胤が伊勢神宮に寄進するということは、寄進を認められたならば、自分たちが現地を支配しているのを妨げる勢力を排除するお墨つきを伊勢神宮からもらえるということなんです。そのために寄進というのを行います。

この文書の日付が1161年の2月27日です。この前の月に別の人物が伊勢神宮にこの土地を寄進しているんです。それが佐竹義宗という人物なんです。これは常陸の豪族ですよ。常陸の豪族はここまでちょっかいを出してきている。佐竹義宗が伊勢神宮に寄進した。佐竹義宗は何でその権利を主張したかという、うそか本当かわかりませんが、先ほどの下総守藤原親通の権利を継承しているということをお墨つきにします。

さらに、佐竹義宗が知恵を働かせたのは、今まで常重、常胤がやっていたのは、内宮に寄進していたんです。内宮だけでなく、内宮と外宮と両方に寄進するとして、実は内宮の神主は荒木田氏です。外宮の神主は度会氏です。この後の動きを見ると、これはなかなか難しい、今度、伊勢神宮の内部での対立なのか交渉なのかわからないけれども、結局、荒木田氏の権利が度会氏、つまり内宮の神主の権利が外宮の神主に渡されて一元化することが伊勢神宮のほうで行われます。その動きと、今度、現地では佐竹氏と千葉氏、つまり義宗と常胤が争っているわけですが、その争いを通して、現地の争いと伊勢での争いはどういうふうに関係しているのかというのは、これまた、いろいろな解釈が可能になるわけですが、そういう関係があつて、佐竹は自分の土地支配を確保するというよりも、新たに相馬御厨を支配下に置くために、そういう伊勢の内宮と外宮と両方に寄進するということをやった。

常胤が頑張ったのは、その翌月です。常胤もそれまでは内宮にだけ寄進していたのを、佐竹義宗と同じことをやります。だから、佐竹義宗が寄進した先にもう1回寄進するわけです。受け付けるほうからすると、1カ月前に寄進を受け付けていたのに、また来た。だ

けど、来たのをまた受領しているんです。そうすると、後のほうが有効になっちゃいますよね。だから、その時点では、常胤は佐竹義宗の介入に対して有効な対抗をしたということになるんだと思います。

その後、現地での佐竹VS千葉、伊勢での度会VS荒木田の争いの決着がどうなったのかということについては、1190年代の伊勢神宮の全国の土地を書き上げた帳簿が残っているんです。その帳簿の中で、相馬御厨は源義宗の支配、つまり佐竹義宗の支配と書かれていますので、従来の研究は、結局、千葉常胤がこれだけ努力したのにもかかわらず、敗退したと解釈しています。だけれども、それはどうかなということ、これからもう1回、史料をきちんと解釈し直さないとわからないことだと。史料の読みというのは結構難しく、表面上書かれていることだけから読むと、そういう結論になってしまうんです。だけれども、史料がこういう書かれ方をしている本体としては実際どういうことが起こったのかということ、をさらに考えてみると、別の考え方ができるはず。

少なくとも手がかりとなるのは、1つには、文書の上で書かれる権利関係と現地の支配関係というのは必ずしも一致するものではない。

それから2つ目には、その後、相馬御厨ってどうなるのということになると、鎌倉時代は常胤の次男、師常というのが相馬家になっていきます。つまり相馬郡というのは、師常の支配下に入っていることが鎌倉時代に入ってから確認できます。

そうすると、そうなる転換があったはずなんです。私は、この時期から千葉常胤の現地支配はずっと続いているんじゃないかとひそかには思っています。ただ、それは史料解釈をきちんとした上でないと表立って言えない。

ただ、もう1つ、この相馬御厨をめぐる対立というのが、実はこの後お話しする頼朝の挙兵にかかわってきます。頼朝が石橋山の合戦に敗れて、海路を安房に逃れて千葉常胤を頼ります。千葉常胤を頼ったときに、常胤が最初に頼朝を迎えるために行ったのは、頼朝に敵対する勢力として千田判官代親政という人物を討ちます。この親政は、何と先ほどの下総守藤原親通の孫かな。要するに下総守をやった後、土着して現地の豪族になっていくんです。それを討つんですよ。それは『吾妻鏡』の書き方では、もちろん頼朝のためなんですけれども、千田親政と千葉常胤というのは、もともと相馬御厨をめぐる争っていた当事者であることは間違いない。そして、千葉常胤がその後、頼朝を迎え、一緒に鎌倉に入り、その後、京都から来た平維盛を大將軍とする追討軍を富士川で撃退し、そのときに頼朝はそのまま京都に向かおうとした。それをとめたのは常胤とか、それから上総介広常

とか、関東の豪族たちです。今は、それよりも関東の足固めをすることが大事だと。

その後やったのは何かといたら、1180年、12月に佐竹を攻めて主力を滅ぼし、佐竹の一部が幕府に従いますから、それを配下に置くんですが、その佐竹との対立というのも、もちろん幕府の足固めのためであることは間違いないけれども、一方で千葉常胤の立場からすれば、やはり相馬御厨だけではなくて、下総、常陸の覇権をめぐる争っている相手ですよね。その争っている相手を倒すために頼朝の軍隊を使ってやるわけですから、あのときは実は下野の小山氏が非常に頑張るんですけども、逆に常胤がどれだけ戦ったのか。出てくるけれども、非常に激しく戦ったのは小山です。

そういった頼朝の軍隊全体の力を使って佐竹と対抗するわけでしょう。だから、それは別に常胤が自分の目的のために公的な権力を利用したということではないと思います。そういうことではないけれども、やはり常胤の、関東の豪族の所領経営の利益を守る立場がまさに鎌倉幕府をつくることと並行して一致して進められたということは間違いない。そうすると、そのことが相馬御厨を確保するという常胤の努力の一環であり、結果から見ると、次男師常に譲られているということは、それが成功したということを示しているんだと思います。

きょう予定した話の前半しかできなくて、本当は頼朝の旗揚げの話をしなくちゃいけなかったんですけども、それは、千葉市が発行している『千葉常胤公ものがたり』という漫画が『吾妻鏡』の本文を結構正確に漫画化しているんですよ。それがいかに見事に漫画に描かれているのかということ、それこそ『吾妻鏡』の原文をきっちり読みながら御説明しようと思ったんですけども、その時間がなくなりました。

あと50秒、あるにはあるんですけども、ここで一旦終わりにさせていただきます。本当はこの漫画も使いながら、鎌倉幕府開幕のときの常胤の記事がどう書かれているのかということをお話したかったのと、事のついでに放送大学に入りましょうねという宣伝もしようと思ったんですけども、ここは遠慮させていただいて、私の話は終わらせていただきたいと思います。どうも御清聴ありがとうございました。(拍手)

○司会 近藤先生、どうもありがとうございました。御来場の皆様、近藤先生に盛大な拍手をお願いいたします。(拍手)

以上をもちまして記念講演を終了いたします。

この後は15分間の休憩に入らせていただきます。次は14時30分から歴史文化フォーラムが始まりますので、それまでに御着席をお願いいたします。

【講師後記】講演のなかで、相馬御厨の支配をめぐって佐竹義宗が千葉常胤と争ったことを述べましたのは、史料には「正六位上前左兵衛少尉源義宗」という表記で現れる人物を佐竹昌義の子義宗に比定する説に従ったものでした。講演後、この「正六位上前左兵衛少尉源義宗」と佐竹義宗が別人物であるという説が既に発表されているとのご指摘をいただきました。佐々木紀一氏のご論文『『平家物語』の中の佐竹氏記事について』（『山形県立女子短期大学紀要』第44号、2008年12月）は、常胤と相馬御厨の支配を争った「源義宗」を佐竹義宗に比定する従来の所説を紹介した上で、この両者を別人物とする所説を展開されています。佐々木氏のご見解は十分説得力のあるものと考えますが、相馬御厨に登場する「源義宗」が佐竹氏であるか否かについては、さらに研究を進めた上で、私見をまとめることにしたいと考えております。